

序論 唯物論という臆説

現代は唯物論科学全盛の時代と言える。周知の通り、唯物論とは、宇宙の森羅万象が物理的次元のみによつて説明できるとする理論であるが、唯物論が絶対的に正しいことを科学的方法——すなわち、主として実験と観察——によつて証明することはできない。科学的方法という経験的手段では、「白いカラス」(James, 1896, p. 319) の実在を否定することは事実上不可能であるため、「カラスはすべて黒い」ことの証明はできないからである。したがつて、唯物論といえども、ひとつの仮説というか臆説にすぎない。

確かにこの仮説は、現実にかかなり高い妥当性をもっている。そのため、この仮説を基盤とした科学分野が数多く生まれ、物理学であれ生物学であれ、あるいは心理学であれ、それなりの進展を遂げるに至つた。生物学という生命を対象にした科学分野では生氣論が敗退し、心理学という心を対象にした科学分野では、心の独立の実在は否定されるか無視された。そして、生物の進化は突然変異と自然選択という機械的要因によつて起こるとされ、人間の心は脳の活動の副産物にすぎないとされた。その結果として、そうした「真理」に適合しない現象は全て却下されたので

ある。

そのような「真理」からすれば、人間も人間の脳も、全て純粹に偶然的な産物ということになる。加えて、人間の心は脳の活動に依拠しているので、脳が死ねば心も消滅する。したがって、脳同士の交信を仮定しないテレパシーや死後の生命のような超常的現象はありえない。^{註1} そのように見える現象があるとすれば、それは全て錯覚か偶然か詐欺的行為によるものでしかないのである。確かに唯物論が絶対的真理であれば、その通りであろう。宇宙の森羅万象は唯物論の枠内で説明できるはずであり、したがって説明できないものは、この世に存在しえないのである。

ところが実際には、唯物論が絶対的に正しいかのような態度が一般の科学者の間に遍く存在するという奇妙な事実がある。もちろん唯物論が森羅万象の一端を説明してくれるのはまちがいないが、だからといって唯物論の無謬性が保証されているわけではない。では、一般の科学者は、なぜそのような、いわば謙虚さを欠く傲慢不遜とも言える態度をとっているのだろうか。また、そうした疑問がほとんど提起されないまま現在に至った理由はどこにあるのだろうか。

唯物論的世界観に対する疑念は、これまでも決して少なくなかった。にもかかわらず、一般の科学分野では、つまり科学者たちの意識の上では、このように唯物論の絶対性は少しも揺らいでいない。科学者たちがそのような「自信」をもっているように見えるのは、唯物論が実際にも正しいためなのであろうか。それとも、何か別の理由に基づく必然的結果なのであろうか。

唯物論の由来

確かに唯物論は、これまでのパラダイムとは、根本的な点で異なっているように見える。地動説や進化論のような革命的仮説が提出された結果として起こった大論争の中では、旧来のパラダイムに則った反論が盛んに行なわれたが、遅かれ早かれその論争に決着がつき、斬新な唯物論的仮説が勝利を収めている。逆に、骨相学や火星の運河説などのように、その事実性を裏づける証拠が得られないものは、早晚その支持を失い、裏づけとなる証拠がその後あらためて提出されることもない。ところが、唯物論の反証となるはずの超常現象の証拠は、既に百四十年近い昔から、心霊研究者ないしは超心理学者と呼ばれる異端の科学者によって提出されてきているにもかかわらず、超常現象の実在は依然として一般の科学者から認められていない。ある社会学者によれば、「科学の枠内で革新的活動が続ける緊密な社会集団が十五年以上も存続することはまずない」(McClenon, 1984, p. 221) という。俎上に載せている問題が解決されるか、その集団自体が消滅してしまうかのいずれかの道をとるからである。したがって、超常現象が実在するとすれば、それにまつわる論争や拒絶のしかたの異質性という点から見て、これまで知られているものとはどこか異質の現象ということになるであろう。

先述のように、現行の唯物論的自然観および人間観と最も鋭く対立するのは、超常現象をおいてない。超常現象の研究は、現行の自然観および人間観の裏に一貫して流れる唯物論という臆説を覆す——そう言つて悪ければ、唯物論の無謬性を反証する——目的で行なわれているからである。それ以外には、そのような目的で組織的に行なわれている研究領域は存在しない。それに対

して、一般の批判者は、現行の自然観によつて超常現象の实在を否定するという没論理的、循環論法的論理を平然と用いる。このような態度は、現行の自然観および人間観が「宗教的」なものであるという事実を自ら暴露していることになるが、にもかかわらずそれを「科学的」などと呼び、科学主義という自らの信仰（あるいは妄想）のほころびを繕っているのである。

いずれにせよ、人間の心ないし感情という点からして唯物論が超常現象の対極にあるとすれば、超常現象と同じく唯物論も、他のパラダイムとは心理的な意味で異質なものである可能性が考えられよう。そうすると、次のような疑問が浮上してくる。唯物論とは、科学的事実のみを基にして構築された理論なのであろうか。それとも、何らかの事情の必然的帰結として表出した観念論なのであろうか。

これまで、そのような問いかけが発せられることはほとんどなかったであろう。しかし、もし唯物論が人間の心の傾向と何らかの関係をもつていとすれば、唯物論の本質を明らかにするうえで、この疑問を俎上に載せることはこのうえなく重要かつ有益なのではなからうか。

ところで、フランスの哲学者、アンリ・ベルクソンは、一九一三年五月の心靈研究協会（SPR）会長講演で、次のような発言をしている。

もしも近代科学が数学から出発して力学・天文学・物理学・化学の方向に向かわず、またあらゆるその努力を物質にだけ集中させずに、精神の考察から始めたとしたら——もしもたとえばケプラー、ガリレイ、ニュートンが心理学者だったらどうなったかと自問いたします。

われわれはきつと今日では考えられないような心理学を持つていたことでしよう。その科学は、機械論的な觀念とはかかわりがなく、みなさんが研究されているような現象をアプリオリに避けることはしないで、熱心に考察したことでしよう。おそらく《心靈研究》はその科学の主な関心の対象のなかに入つていたでしよう。〔中略〕

そこで生物学が作られたでしようが、それはわれわれのいまの生物学とはまったく違つていて、生氣論的な生物学、つまり、生命体の感知できるかたちの背後にあつて、そのかたちによつて表わされている、内部の目に見えない力を探求する生物学だつたはずでしよう。〔中略〕

この生氣論的な生物学と同じときに、生命力の不十分なところを直接に直すような医学が始まつたことでしよう。それは、結果ではなく原因を、周辺ではなく中心を目標とするような医学だつたでしよう。暗示による治療、或いはもつと一般的には精神に対しての精神の影響力による治療が、われわれには推測できないかたちと重要性を得たでしよう。〔中略〕

これが私が時どき夢想して楽しんでゐることです。しかし、私はこの夢想をしてもすぐにやめて次のように考えます。そうではないのだ、人間精神がこのような道をたどるのは可能なことでも望ましいことでもなかつたのだと。それが可能でなかつたのは、近代の始まりにおいてすでに数学的な科学が存在しており、われわれが生きている世界についての知識でこの科学が与えるもののすべてをそこから引き出すことから始める必要があつたからです（ベルクソン、一九九二年、九七—八、二〇〇ページ）。

このようにベルクソンは、物理学以前に、心を中核に据えた科学知識体系が発達することはありえなかったと述べているわけであるが、そのことは現実の科学の発展過程に基づく必然的結果だとして、それ以外の理由は念頭に置いていなかったようである。〔補註〕もしベルクソンの考えかたが正しいとすれば、超常現象の实在が一般の科学者たちにここまで認められないのは、従来の科学者が、たまたま先に発生していた唯物論というパラダイムに完全に染まってしまっており、その抛つて立つ基盤が崩壊するのを恐れるためということになるであろう。しかしながら、唯物論が発生した時間的経過にしても、超常現象が一般の科学者にここまで認められないという歴史的事実にしても、他の理由は考えられないものであろうか。

超常現象の研究者自身を含め、科学者には、超常現象に対する強い感情的抵抗が潜んでいるらしいことが、これまでの考察（笠原、一九八七年b、九三年a）から既に明らかになっている。この抵抗は、唯物論に執着しようとする強い感情的傾向と見ることもできる。もしそうだとすれば、唯物論は人間の心に潜む何らかの傾向の必然的現われと考えることができるであろう。

唯物論と超常現象のとらえにくさ

後述する目標指向性と双壁をなす超常現象の特徴は、そのとらえにくさである（笠原、一九九三年a）。奇妙な特性であるが、超常現象が実在するとすれば、少なくとも現段階では、この要素も必然的に随伴する。当然のことながら、この特性も唯物論とは鋭く対立する。量子力学の不確

定性関係のように、一見すると似通った現象はこれまでも知られているが、超常現象のとりえにくさは、それとは全く異質の現象に見える。不確定性関係の場合には、いわば不確定が確定されているのに対して、超常現象のとりえにくさの場合には、超常現象自体があたかも意志をもっているかのように、さまざまな戦略を用いて、とりえようとする人間の意志に逆らうからである。ほとんどの超心理学者は、統計的方法を用いてかろうじて有意な結果が得られる程度の実験を好み、被験者が得られにくいという事情とは別に、スプーン曲げや念写や物質化現象に代表されるマクロPKの実験や観察は忌避しているように思われる。そうした点からすれば異端中の異端であつた英国の超常現象研究者、ケネス・バチエルダーは、昔の交霊会風の実験状況の中で次のような観察をしている。

何らかの検証や管理を行なおうとすると、こうした〔テーブル浮揚などの〕現象はいつも減衰ないし消滅した。浮揚中の物体を撮影しようとするカメラが「攻撃」され叩き落とされるか、不可解な故障を起こすかした。念力は、「追いつめられる」と、記録装置を使いまのにならなくしてその支配から逃れることを「決意」するように見える。あるいはまた、そ

【補註Ⅰ】ただし、ペルクソンは、次のような発言もしている。「哲学と科学は、この仮説（心身二元論）と矛盾するもの、或いはそれに反するものを本能的に避けようとする傾向があります」（ペルクソン、一九九二年、八八ページ）。この種の抵抗の存在は十二分に承知していたのである。